

# 国際バカロレアの導入がわが国の教育に及ぼす影響

土平 健雄  
愛知学泉大学

## The Influence of Introduction of International Baccalaureate to Japan

Takeo Tsuchihira

キーワード：国際バカロレア International Baccalaureate、 グローバル化 globalization、  
主体的・対話的で深い学び active learning

### 1. はじめに

わが国では、いわゆるグローバル化・ボーダレス化の進展に伴い、近年急速に教育改革が進行している。中でも特に、教授法の改革は急務とされ、初等教育段階から高等教育段階まで、主体的・対話的で深い学び、即ちアクティブ・ラーニングへの転換が求められている。そんな中で、近年わが国では国際バカロレア (International Baccalaureate, IB) なるものがにわかに注目を浴びるようになってきた。

思えば、2014 (平成 26) 年 11 月 20 日に、当時の下村博文・文部科学大臣が中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問したが、その諮問理由の中で、国際バカロレアがアクティブ・ラーニングの代表的な事例のひとつとして言及されていたことは記憶に新しい。

「新しい時代に必要な資質・能力の育成に関しては、これまでも、例えば、OECD が提唱するキー・コンピテンシーの育成の取組や、論理的思考力や表現力、探究心等を備えた人間形成を目指す国際バカロレアのカリキュラム、ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育 (ESD)、東日本大震災を契機に、様々な現実的課題と関わりながら、被災地の復興と安全・安心な地域づくりや日本の未来を考えようとする新しい教育の取組などがある。

これらの取組に共通するのは、ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうし

た教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていくことが重要であるという視点である。」<sup>1)</sup>

ところで、わが国では国際バカロレアはまだ一般にはそれほど認知されておらず、フランスの有名な大学入学資格取得試験であるバカロレアと混同している人が多いのではないかと推察される。

そこで本稿の目的は、グローバル化、アクティブ・ラーニング、高大連携などの切り札として導入が進められているこの国際バカロレアがわが国の教育に及ぼす影響を考察することにある。

### 2. 国際バカロレアを導入する目的

2012 (平成 24) 年 3 月から 2014 (平成 26) 年 3 月まで、文部科学省大臣官房国際課で、国際バカロレアの導入推進業務を担当していた佐々木邦彦氏は、以下のように述べている。<sup>2)</sup>

下記の文書に示された通り、政府、文部科学省では 2018 年度までに国際バカロレア認定校等を 200 校とする目標を掲げることとなった。

○「日本再興戦略—JAPAN is BACK— (平成 25 年 6 月 14 日 閣議決定)」

「一部日本語による国際バカロレアの教育プログラムの開発・導入等を通じ、国際バカロレア認定校等の大幅な増加を目指す (2018 年までに 200 校)。」

○教育再生実行会議第3次提言「これからの大学教育等の在り方について」（平成25年5月28日）

「国は、国際バカロレア認定校について、一部日本語によるディプロマ・プログラムの開発・導入を進め、大幅な増加（16校→200校）を図る。」

○教育再生実行会議第4次提言「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」（平成25年10月31日）

「大学は、入学者選抜において国際バカロレア資格及びその成績の積極的な活用を図る。国は、そのために必要な支援を行うとともに、各大学の判断による活用を促進する。」

また、経済界等からもバカロレアの推進について、積極的な提言が見られた。

○日本経済団体連合会「世界を舞台に活躍できる人づくりのために」ーグローバル人材の育成に向けたフォローアップ提言ー（平成25年6月13日）

「語学力のみでなく、コミュニケーション能力や異文化を受容する力、論理的思考力、課題発見力などが身に着くIBディプロマ課程（16歳～19歳対象）は、グローバル人材を育成する上で有効な手段の一つである。」

「ディプロマ取得者に対する社会における適切な評価も重要であり、大学入試における活用や、企業も採用時や人材活用において適切に評価することなどが重要である。」

「我が国においても、入試の際、TOEFLやTOEICなどの英語能力の4技能を測定できる外部試験を活用することや、入試においてIB資格を活用する大学を拡大することなども検討すべきである。」

それでは、なぜ政府はIB導入を推進しようと考えたのだろうか。

1つは、IBの教育プログラムの持つ特性、すなわち双方向型・協働型の学習や教育理念等が学習指導要領の目指す方向性と軌を一にするものであり、グローバル人材育成の有効なツールと考えられるからである。IBの目指す教育理念は、課題解決・発見能力、コミュニケーション力、異文化理解、加えて英語を中心とした外国語運用能力など、グローバル人材に求められる素養・能力そのものと言える。

2つは、生徒の進路選択の拡大である。IBスコアを持つことで、国内はもとより、海外大学への進学可能性も広がり、進路選択の自由度が高まる。

3つは、日本の高校教育改革や大学の国際化への

寄与である。今後、我が国の大学でも、IBを活用した入試が積極的に行われるようになれば、IBの特徴的な学びを経た国内外の学生が我が国の大学に入ってくることとなり、良い意味での「化学反応」が期待できる。

以上が、あくまでも個人的見解としながらも、初期の実務を担当した佐々木邦彦氏の考えるIB導入の目的である。

佐々木氏が担当を外れた2014（平成26）年以降も今日に至るまで主に経済界を中心に多くの提言が出され続けている。<sup>3）</sup>

○日本経済団体連合会「次代を担う人材育成に向けて求められる教育改革」（平成26年4月15日）

「グローバル化に対応するためには外国語能力とともに、課題を発見し解決する能力や論理的思考力、コミュニケーション能力、さらに日本の近現代史に関する知識を含む幅広い教養を育む必要がある。政府も、英語力に加え、問題解決能力や社会課題に関する深い関心と教養を身につけたリーダー人材を育成する「スーパーグローバル・ハイスクール」の認定（2014年度56校）や、国際バカロレア（IB）課程教育を行うIB認定校の拡大（2018年度までに200校へ）など、グローバル人材育成のため、教育機関の創意工夫や特色を活かした教育を推進する方針を打ち出している。こうした取り組みを更に拡大するとともに、横展開させる必要がある。IBを教授できる人材の育成・確保が喫緊の課題であり、教員養成大学等において迅速に取り組むことが求められる。」

○教育再生実行会議第7次提言「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」（平成27年5月14日）

「国際バカロレア認定校を大幅に増加させる。」

○「まち・ひと・しごと創生基本方針2015」（平成27年6月30日閣議決定）

「国際的に通用する大学入学資格が取得可能な教育プログラム（国際バカロレア・ディプロマ・プログラム）については、科目の一部を日本語で実施しても認定可能となるプログラムの開発に引き続き取り組む。」

○「まち・ひと・しごと創生総合戦略（2016改訂版）」（平成28年12月22日閣議決定）

「国際的に通用する大学入学資格が取得可能な教育プログラム（国際バカロレア）の普及拡大を図り、

2020 年までに国際バカロレア認定校等を 200 校以上に増やす(2014 年の 74 校から 2016 年 10 月現在で 101 校に増加)。」

○「今後の教育改革に関する基本的考え方」一第 3 期教育振興基本計画の策定に向けて―(平成 28 年 4 月 19 日)

「グローバル人材に求められる素質や能力を育む上で、国際バカロレア (IB) 教育は有効であり、その普及に向けた政府目標を達成すべきである。具体的には、① IB 課程を教授できる教員の確保・養成(教員養成大学における IB 教授コースの新設・拡大)、② わが国の大学入試における IB ディプロマ資格の活用促進、③ IB 課程と学習指導要領の要件の双方を無理なく取得するための制度の新設が必要である。また家計が少ない経済負担で子弟に IB 教育を受けさせられるよう、国公立高校において IB 教育を普及させることも重要である。IB 教育の普及は、国内で働く外国人人材の子弟の教育環境の整備にも繋がる。」

○国立大学協会「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン 工程表 (平成 27 年 9 月 14 日)」

「入試改革の一環として、「推薦入試、AO 入試、国際バカロレア入試等の拡大(入学定員の 30%を目標)」を行うとしている。」

○日米文化教育交流会議「日米文化教育交流会議 (CULCON) 教育タスクフォース報告書 (平成 25 年 6 月 13 日)」

「国際バカロレア資格を取得可能なプログラムを拡充する。」

このように、政府、文部科学省、経済界、大学が挙げて導入を進めている国際バカロレアとは一体どのようなものであろうか。

### 3. 国際バカロレアとは何か

#### (1) 国際バカロレアの歴史

国際バカロレアとは、スイスの財団法人国際バカロレア機構 (The International Baccalaureate Organization, IBO) による国際的学習プログラムのことである。

国際バカロレア機構が正式発足したのは 1968 年である。すでに半世紀近い歴史を持つ国際バカロレアであるが、昨今、グローバル化の中で、大学入学資格の国際共通性とカリキュラム改革の観点から注

目されている。ここでは、国際バカロレアの確立に歴史的役割を担った学校や人物を岩崎久美子氏の所論から紹介しよう。<sup>4)</sup>

#### ①ジュネーブ国際学校

国際バカロレアにつながる国際的な大学入学資格への構想は、ジュネーブ国際学校の教員たちから生じた。ジュネーブ国際学校は、国際連盟本部に勤務する子弟のために、1924 年に設立された世界最初の国際学校である。

ジュネーブ国際学校では、当初、大学進学に際して、進学先の大学入学資格(アメリカ・SAT、フランス・バカロレア、イギリス・GCE-A レベル、ドイツ・アビトゥアなど)取得のための教育を個別に行っていた。このような教育は、国際学校の理念に反し、学校経営上も負担の多いものであった。そのため、国際学校で共通の中等教育を修了させ、各国の大学に円滑に入学させうる国際的共通カリキュラムと、世界的に認証される大学入学資格が必要であった。国際バカロレアの試行や実践がこの学校で行われたのは、国際バカロレアのような国際的な教育への需要と意識の高さがあったゆえである。

#### ②国際学校協会

国際学校でのこのような問題意識は、国際学校のネットワーク化により、組織だった取組となっていく。1951 年には、ユネスコからの資金援助などを受け、国際学校間の協力促進、教育課題に関わる研究推進、国際理解や世界平和の追求、大学入学を円滑にさせるカリキュラム開発などを目的に、国際学校協会が設立された。

国際バカロレア発足の契機ともいえるのは、この国際学校協会が 1962 年にジュネーブで開催した社会科カリキュラムに関する会議といわれる。この会議で、ジュネーブ国際学校の歴史科主任リーチ議長の下、社会科の共通シラバスと試験について議論がなされ、高等教育への国際的パスポートの意味を込めて「国際バカロレア」という言葉が提案された。

#### ③国際学校試験委員会

1963 年、20 世紀基金の助成金により、国際学校協会の内部に、国際的共通試験を模索する検討委員会、国際学校試験委員会が設置された。この委員会は、1965 年に国際学校協会から分離し、後に国際バカロレア機構の母体となる。

国際学校試験委員会は、1967 年にフォード財団から、国際的共通カリキュラムや試験を検討するため、

3年間の助成金を受ける。同年、パリ郊外セーヴルにある「教育研究国際センター」で12ヶ国からなる専門家により、試験案を検討する最初の会議が開かれた。ここで提案された試験案は6教科（上級レベル3教科、標準レベル3教科）で構成され、ディプロマ・プログラムの原案となった。

以上が国際バカロレアの誕生に至るまでの略史である。

以下、現在の国際バカロレアの理念、プログラム、評価について文部科学省の資料から紹介したい。

## (2) 国際バカロレアの理念

国際バカロレアの理念は、一貫した国際教育の観点から、「IBの使命」や「IBの学習者像」として示されている。

### ① IBの使命 (The IB mission)

「IBの使命」は以下のとおりであり、国際教育プログラムを推進し、発展させることの総体的な目的が示されている。

「国際バカロレア (IB) は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人々がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけしています。」

このようにIBプログラムでは、「国際的な視野」をより明確な言葉で定義づける試みと、実践を通じてその理想に近づこうとする努力を、IB認定校の使命の中心として位置づけている。

### ② IBの学習者像 (The IB Learner Profile)

「IBの学習者像」は、「IBの使命」を具体化したもので、「国際的な視野をもつとはどういうことか」という問いに対するIBの答えの中核を担っている。具体的には、IB認定校が価値を置く人間性を、以下10の人物像として表している。

- ・探究する人
- ・知識のある人
- ・考える人

- ・コミュニケーションができる人
- ・信念をもつ人
- ・心を開く人
- ・思いやりのある人
- ・挑戦する人
- ・バランスのとれた人
- ・振り返りができる人

## (3) 国際バカロレアのプログラム

IBプログラムは、アイデンティティー形成期にある年齢の児童生徒の発達ニーズとともに、学校が地域から求められる教育的要件、文化的状況や優先事項にも合わせられるよう、カリキュラムを編成している。

このため、PYPとMYPでは、主にカリキュラムの「枠組み」を提供している。一方、DPでは、世界中の大学への入学資格を生徒に授与することから、所定のカリキュラムが提供され、プログラムの規定が多くなっている。

### ① プライマリー・イヤーズ・プログラム (PYP)

PYP (Primary Years Program) は3歳～12歳までを対象としており、精神と身体の両方を発達させることを重視しているプログラムである。どのような言語でも提供可能である。

PYPのカリキュラムは、国際教育の文脈において不可欠とされる人間の共通性に基づいた以下の6つの教科横断的なテーマが中心となっている。

- ・私たちは誰なのか
- ・私たちはどのような時代と場所にいるのか
- ・私たちはどのように自分を表現するか
- ・世界はどのような仕組みになっているのか
- ・私たちは自分たちをどう組織しているのか
- ・この地球を共有するということ

これらの横断的テーマに取り組むにつつ、PYPのカリキュラムでは、以下の6教科を学習する。

- ・言語
- ・社会
- ・算数
- ・芸術
- ・理科
- ・体育（身体・人格・社会性の発達）

### ② ミドル・イヤーズ・プログラム (MYP)

MYP (Middle Years Program) は11歳～16歳までを対象としており、青少年に、これまでの学習



と社会のつながりを学ばせるプログラムである。どのような言語でも提供可能である。

MYP では、以下の 8 教科を学習する。全ての生徒が 5 年のプログラム期間にわたってこれらの教科に取り組む。

- ・言語 A
- ・言語 B
- ・人文科学
- ・理科
- ・数学
- ・芸術
- ・体育
- ・テクノロジー

8 教科は従来の教科を越えた「相互作用のエリア」(AOI : areas of interaction) である以下 5 分野と関連しており、PYP の横断的テーマと似た形で人間の共通性に焦点を当てている。この「相互作用のエリア」は、全教科に共通して適用され、生徒が、各教科を他の教科や実社会とは関連性のないものとして孤立的に捉えるのではなく、教科内容と実社会との関連性に対して認識を高められるよう働きかけることを目的としている。

- ・学習の方法 (approaches to learning)
- ・コミュニティと奉仕活動
- ・人間の創造性
- ・多様な環境
- ・保健教育と社会性の教育

これらを通じて、MYP では、知識を統合された総体的なものとして示し、生徒がより広く、より複雑なグローバルな課題に対する認識を高めることが期待されている。

### ③ ディプロマ・プログラム (DP)

DP (Diploma Program) は 16 歳～19 歳までを対象としており、所定のカリキュラムを 2 年間履修し、最終試験を経て所定の成績を収めると、国際的に認められる大学入学資格 (国際バカロレア資格) が取得可能なプログラムである。「日本語 DP」の対象科目等を除き、英語、フランス語又はスペイン語で実施している。

ディプロマ・プログラム (DP) のカリキュラム

DP のカリキュラムは、以下の 6 つのグループ (教科) 及び「コア」と呼ばれる 3 つの必修要件から構成される。

生徒は、6 つのグループから各教科ずつ選択し、6

科目を 2 年間で学習する。ただし、「芸術」(グループ 6) は他のグループからの科目に代えることも可能となっている。

また、大学やその後の職業において必要となる専門分野の知識やスキルを、大学入学前の段階で準備しておく観点から、6 科目のうち、3～4 科目を上級レベル (HL、各 240 時間)、その他を標準レベル (SL、各 150 時間) として学習する。さらに、カリキュラムの中核となる核 (「コア」) として、以下の 3 つの必修要件を並行して履修する。

グループ名	科目例
1 言語と文学 (母国語)	言語 A : 文学、言語 A : 言語と文化、文学と演劇
2 言語習得 (外国語)	言語 B、初級語学
3 個人と社会	ビジネス、経済、地理、グローバル政治、歴史、心理学、環境システム社会 (※)、情報テクノロジーとグローバル社会、哲学、社会・文化人類学、世界の宗教
4 理科	生物、化学、物理、デザインテクノロジー、環境システムと社会 (※)、コンピュータ科学、スポーツ・運動・健康科学
5 数学	数学スタディーズ、数学 SL、数学 HL、数学 FHL
6 芸術	音楽、美術、ダンス、フィルム、文学と演劇 (※)

(※) なお、「文学と演劇」はグループ 1 と 6 の横断科目。「環境システムと社会」はグループ 3 と 4 の横断科目。また、「世界の宗教」および「スポーツ・運動・健康科学」は SL のみ。

コア (必修要件)

#### ○課題論文 (EE : Extended Essay)

履修科目に関連した研究分野について個人研究に取り組み、研究成果を 4,000 語 (日本語の場合は 8,000 字) の論文にまとめる。

#### ○知の理論 (TOK : Theory of Knowledge)

「知識の本質」について考え、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究する。批判的思考を培い、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促す。最低 100 時間の学習。

#### ○創造性・活動・奉仕 (CAS : Creativity / Action / Service)

創造的思考を伴う芸術などの活動、身体的活動、無報酬での自発的な交流活動といった体験的な学習に取り組む。

#### (4) 国際バカロレアの評価

国際バカロレア資格の取得には、DP カリキュラムを全て履修し、外部評価(国際バカロレア試験等)及び内部評価を通じて、45 点満点中、原則として 24 点以上を取得する必要がある。

配点は、6 科目につき各 7 点(計 42 点)。さらに、必修要件(「コア」)について、TOK と EE の評価結果の組み合わせに応じて最大 3 点が与えられる(CAS は評価対象外)。

国際バカロレア試験は、南半球と北半球の学校年度に対応できるよう、年 2 回、世界で一斉に実施される。日本の 1 条校の場合は、原則として 3 年次の 11 月に実施され、翌年の 1 月 5 日に最終スコアが通知される。

DP の授業・試験は、原則として、英語、フランス語又はスペイン語で行う必要があるが、現在、文部科学省と国際バカロレア機構が協力して、DP の一部の科目を日本語でも実施可能とするプログラムの開発を進めている。

## 4. わが国の導入の現状

国際バカロレアのプログラムは、全て導入することも、どれか 1 つのみ導入することも可能となっており、国際バカロレアの認定を受けている学校は、平成 29 年 6 月 1 日現在、世界 140 以上の国・地域において 4,846 校である。

日本における認定校は、インターナショナルスクールを除く学校教育法第 1 条に規定されている学校では、市立札幌開成中等教育学校、仙台育英学園高等学校、茗溪学園高等学校、ぐんま国際アカデミー、昌平中学校、筑波大学附属坂戸高等学校、玉川学園中学部・高等部、東京学芸大学附属国際中等教育学校、東京都立国際高等学校、山梨学院大学附属高等学校、インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢、法政大学女子高等学校、サニーサイドインターナショナルスクール、加藤学園暁秀高等学校・中学校、名古屋国際中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校、英数学館高等学校、AICJ 中学・高等学校、リンデンホールスクール中高学部、沖縄

尚学高等学校の 20 校である。

教育界の黒船といわれ、わが国の教育を変える起爆剤の期待がかけられながら、様々な施策にもかかわらず、2018 年度までに 200 校という目標にはまだまだ遠いのが現状である。本稿では触れることができなかったが、言葉の壁以外にも、世の中の理解、教員の確保や養成など多くの課題が横たわっている。拙速を避け、地道な努力が必要であろう。

## 引用文献

- 1) 26 文科初第 852 号「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」平成 26 年 11 月 20 日
- 2) 佐々木邦彦「IB 導入促進に向けた文部科学省の対応」岩崎久美子・大迫弘和編著『国際バカロレアの現在』ジエース教育新社、2017、pp.99-100.
- 3) 文部科学省ホームページ、国際バカロレアについて [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/index.htm) (2017 年 9 月 10 日現在)
- 4) 岩崎久美子「国際バカロレアの歴史」岩崎久美子・大迫弘和編著『国際バカロレアの現在』ジエース教育新社、2017、pp.12-13.

## 参考文献

- 田口雅子『国際バカロレアー世界トップ教育への切符』松柏社 (2007)
- 大迫弘和『国際バカロレア入門―融合による教育イノベーション』学芸みらい社 (2013)
- 江里口敏人『IB 教育がやってくる!―「国際バカロレア」が変える教育と日本の未来』松柏社 (2014)
- 坪谷ニューエル郁子『世界で生きるチカラ―国際バカロレアが子どもたちを強くする』ダイヤモンド社 (2014)
- 大迫弘和編著、長尾ひろみ・新井健一・カイト由利子著『国際バカロレアを知るために』水王舎 (2014)
- 福田誠治『国際バカロレアとこれからの大学入試改革―知を創造するアクティブ・ラーニング』亜紀書房 (2015)
- 中島さおり『哲学する子どもたち―バカロレアの国フランスの教育事情』河出書房新社 (2016)
- 大迫弘和『アクティブ・ラーニングとしての国際バカロレア―「覚える君」から「考える君」へ』日本標準 (2016)
- Sue Bastian, Julian Kitching, Ric Sims 著、大山智子訳、後藤健夫編『セオリー・オブ・ナレッジ―世界が認めた「知の理論」』ピアソン・ジャパン株式会社 (2016)
- 岩崎久美子・大迫弘和編著『国際バカロレアの現在』ジエース教育新社 (2017)